

## 39 日清・日露戦役時の恩賜の義肢

—松山俘虜收容所を中心に—

石 原 理 年

旧軍人戦傷上下肢切断者に交付された恩賜の義肢については、本誌二八巻三号に武智の報告があるが、俘虜負傷者については触れていない。

明治十九年十月二十五日、万国赤十字条約に加盟したわが国は、二七・八年戦役による清国俘虜負傷者を、東京、名古屋、豊橋、松山等の衛戍病院に收容した。三七・八年戦役では、万国赤十字負傷兵を救助するための一八六四年八月二十二日付条約第六条に基づき、明治三十七年五月六日、松山衛戍病院にも露国俘虜傷病者收容命令が下り、病院の一部と市内大林寺の勧善寺をこれに充て、五月十五日九連城戦闘の負傷者二九四名を收容した。六月十六日温泉郡城北練兵場内に病室五棟の他、手術・管

理室等を含む病院が完成移転した後次々と増築され、明治三十九年二月十六日業務を完了するまでに收容した患者総数は四二九名に達し、その内銃砲創三一四一名中廃疾症者は、戦傷一七〇名・凍傷二三名の一九三名であった。廃疾者には一旦退院手続がされた上、病棟の一部に設けられた廃兵室に收容され、衛生部員が介補看護にあたり、皇后の名で恩賜の義肢が交付された。

二七・八年戦役では、此度戦争ニ付将校下士卒等負傷ノ為メ又ハ凍傷等ノ為メ手足切断等ノ者有之趣、皇后陛下 被為聞召 思召ヲ以テ人工手足ヲ賜ハリ御手許金ノ内ヨリ右費用ニ被充候旨 御沙汰被為在候間其筋へ御達ノ上 思召貫徹候様可然御取計ヒ相成渡云々

明治二十八年一月十五日 皇后宮太夫子爵香川敬三 陸軍大臣伯爵西郷従道、海軍大臣伯爵西郷従道殿。と通牒、尚軍人外と雖も軍事に関し手足を失いたる者、且つ救護の俘虜患者にも同様交付されること、陸軍関係の事務取扱いを石黒忠憲衛生長官に命ずることが陸軍大臣より参謀総長に移牒された。これに基づき交付された義肢は、義手三二具、義足九十具で、内清国俘虜患者に対

しては義足八具、義手一具であった。

三七・八年戦役に於ても同旨により交付され、松山俘虜收容所病室業務報告書は、病室規定第七三〜七条に申請・交付手続様式を定めている。抄録すると、申請について主任軍医は周密確実な測尺寸法書と模型図、ギプス模型を添え軍医正を経て所長に提出し、所長は軍医部長師団長を経て陸軍大臣に行うこと。交付時には、所長軍医正看護長ら列席の上、所長より皇后思召の旨を訓示、交付された義肢を、病衣ヲ着タル儘ニテ切断部ヲ裸露シ義肢ヲ身辺適當ノ位置ニ保チタルモノ。病衣ノ儘義肢ヲ装着シ衣ヲ褰ケテ其ノ部ノ装置シタルモノ。義肢ヲ装シ軍服ヲ着シ儀容ヲ正シタルモノ。以上三種のカビネ型写真（裏面に原籍隊号等級姓名を附記し台紙に貼付ないもの）と、自記筆（執筆不能者は通訳が代書し拇印を捺す）の露文と和文の拝受書を添え、軍医正より所長師団長を経て陸軍大臣に提出することとされている。

交付式に於ける所長訓示の要点は、汝等祖国ノ為メ勇戦シ身ニ創傷ヲ蒙リ俘虜トナリ当バラック病室ニ收容セラレ充分ナル治療ヲ受ケタルモ遂ニ不具ノ身トナレリ茲

仁ナル我 皇后陛下ハ深く汝等ヲ憫然ニ思召サレ今回義手義足等ヲ賜ル汝等謹ンテ之ヲ拝受セヨ。

答辞は、戦争ノ結果不具トナリタル我等露国軍人ハ博愛仁慈ナル日本帝国 皇后陛下ヨリ義肢ノ無上ノ御下賜品ヲ辱シ赤心ヲ以テ感謝ノ意ヲ表彰ス 皇后陛下カ我等一匹夫ニマテ大御心ヲ悩マシ給フコト感泣ノ至リニ堪ヘス我等ハ 皇恩厚キヲ奉載シ終生忘レサランコトヲ誓フ又光榮アル御下賜ノ為メ稟申ノ勞ヲ煩ハシタル收容所長殿軍医正殿ニ深く感謝ス余ハ今茲ニ列シタル露国傷病者ノ一般ヲ代表シ蕪辞ヲ述ヘ聊カ感謝ノ辞ニ代ユ。明治年月日 某敬白。と述べ式を閉じている。

松山收容所に於ける義肢交付数は、上腕義手一三、前腕義手三、大腿義足五五、下腿義足一三、両下腿義足八、右大腿左下腿義足一、左大腿右下腿義足一の計九六具である。

西南戦役時の戦傷者にも義肢が交付された。時の政府によるもので恩賜か否か疑問であるが、わが国の義肢製作は、この時期より舶来義肢を慣って始められた。

日清・日露戦役時の恩賜の義肢は、殆んどが木製で桐

を剥り貫いたソケット内面に漆を塗り断端袋で適合調整をし、足継手は固定式のため特に坂道の昇降は不便であった。

三七・八年戦役松山俘虜収容所を中心に、恩賜義肢交付とその意図を探ってみたい。

(京都大学)

坪井良子

#### 40 大隈重信の義足―その原因と生活―

明治時代の政治家であり、また早稲田大学の創設者でもある大隈重信は明治二十二年条約改正に反対する暴漢の投げた爆弾によって右脚を負傷し、ついに切断手術を受けることになり、その後義足での生活を余儀なくさせられた。

本研究では大隈重信の義足生活に至った経緯とその病床生活、義足装着とその後の生活について詳述する。

大隈重信は天保九(一八三八)年二月十六日佐賀藩会所小路に生れ、幼名を八太郎といった。大隈が生まれ成長した時代は、徳川封建制度の崩壊寸前のときであり、日本は開国を迫られ、何もかもが変革の時期であり、まさにわが国未曾有の転換期でもあった。